

【第二十回】「毛筆学習の発展」

— 学びの指標 (段位認定試験を生かす8 / 漢字仮名交じり書を学ぶ) —

静岡大学教授
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

段位が上がると、課題語句の文字数が増え、「八ツ切」や「半切」サイズの画仙紙におさめる力が求められます。そこで、既習の学びを生かして個々の文字の字形や線質を工夫するだけでなく、文字相互の調和や行の取り方や全体の構成等への意識が必要になります。

今回は画仙紙へのおさめ方 (紙面構成) を確認しながら、「漢字仮名交じり書」の学習について述べていきます。

■画仙紙へのおさめ方の留意点

画仙紙八ツ切や半切作品を書く際の手立ての

一つとして、本連載の第六回 (平成28年9月号)

では、折り目をつける方法をお伝えしました。

それは、あくまでも同じ大きさの文字をおさめる際の目安です。

ここで、過去の優秀作品 (隷書・創作) を例に、おさめ方を確認していきましょう。

Aは各文字が堂々とし、太目の線と三角状の波磔が紙面を充実させています。ただ、「白」

A 七段・隷書・創作「白雲抱幽石」(半切)

白雲抱幽石

B 七段・隷書・創作「雲破月來池」(半切)

雲破月來池

は上方の画間が広いために重心が下がり、「雲」はやや縦長で大きく見えます。「幽」が少し右上がりなことも、中心をがたつかせる要因となり、作品の下半分を不安定に感じさせます。字形の捉え方が大きさや中心に影響するので留意しましょう。また、点画の起筆を重くし過ぎると、文字間や点画間の気脈が途切れて見えるので、気をつけましょう。

Bの作品は、線がやや固いものの、波磔が統一され、まとまっています。「破」の中心や字間を均一にすると、さらに充実します。

扁額 (横形式) の作品では、「文字の重心」を意識しておさめる必要が生じてきます。Cの作品 (次ページ) では、「吹」の重心がやや低く、「更」「明」は最上部の横画の位置が高いために、他の文字よりも上がっているように見えます。

画仙紙の上部に余白を確保する場合、最上にある横画は、縦方向の画（ここでは「吹」や「窓」等の矢印部分）よりも少し下げた位置に書きましょう。

C Ⅱ八段・隸書・創作「吹灯窓更明」（扁額・半切）

修正箇所



- ・「吹」の○部分を短くして(参考「史晨後碑」)重心を上げる。
- ・「更」「明」を「窓」の画目等(矢印)より下げる。
- ・落款を少し小さくして、本文の高さよりも短くおさめる。

修正後



■「漢字仮名交じり書」を
大色紙におさめる

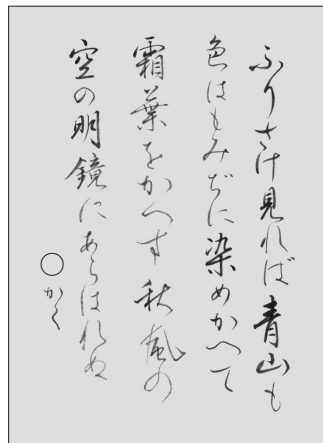
本誌の段位認定試験の「漢字仮名交じり書」の課題は、四段と五段は半紙（縦横自由）に、六段は大色紙、七段は画仙紙半切、八段は画仙紙全紙二分の一におさめることになっています。

D（半紙）は、連綿れんめんが自然で漢字ともよく調

和しています。仮名古筆かなこひつの学習が生きている作品といえるでしょう。ただ惜しいことに、二行目からは行頭が揃そろっているのに一行目が少し下がって行末は不揃いです。行間を見ても、初め（一行目と二行目の間）だけが狭くなっているの、何を意図しておさめたのかが、よく分かりません。

行頭と行末を揃えて「行書き」にするのか、行頭だけを揃えるのか、あるいは行末を同じ位置にして行の上部に高低差をつけるのか等、明確にしておさめましょう。

D Ⅱ五段・漢字仮名交じり・創作



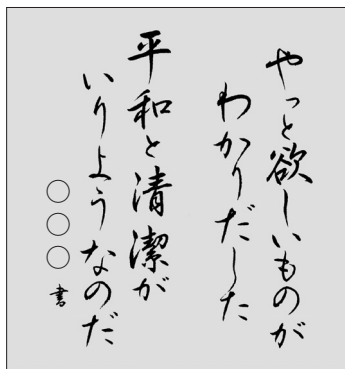
「漢字仮名交じり書」の半紙へのおさめ方については、本連載の第十一回（平成29年2月号）に述べましたので、ここでは六段に出題された大色紙の作品例について、見ていきましょう。

Eの作品は、二つの文からなる課題をそれぞれ一文ごとにまとまりとして構成した、「確かな書写力に支えられた漢字仮名交じり書」といえるでしょう。全体に文字を少し小さくすると、さらに余白が効いてくるでしょう。

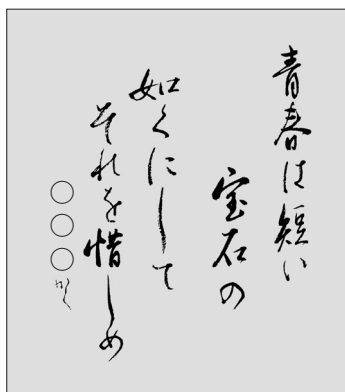
Fの作品は、紙面の余白を生かしています。ただ、一行目は「青」や「春」「短」の字幅を狭めて細身に構えているのに、他の行では字幅を広めに捉えていて、不統一に感じられます。「宝石」「如く」「そ」「惜」。このように、字形の捉え方は、おさめ方にも影響します。

その点、Gの作品は、行の流れに不自然さはあるものの、曲線を生かした個性的な字形で紙面全体がまとまっています。紙面全体の統一感

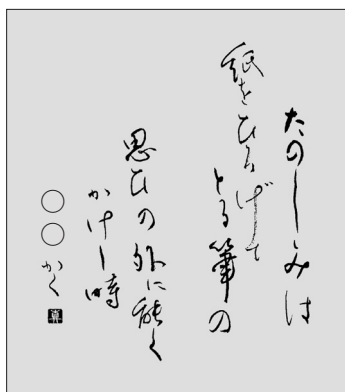
E Ⅱ六段・漢字仮名交じり・創作



F Ⅱ六段・漢字仮名交じり・創作



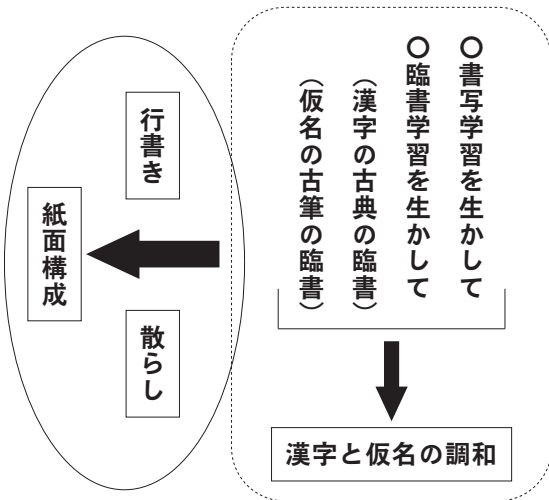
G Ⅱ六段・漢字仮名交じり・創作



が重要であるということが、お分かりいただけるでしょう。

■「漢字仮名交じり書」をどう書くか

おさめ方を見てきたところで、改めて、第十一回に記した「漢字仮名交じり書」の書き方の手順を挙げておきます。



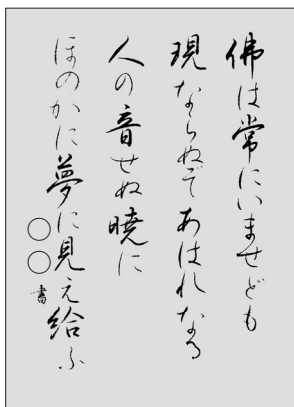
周知のことながら、「漢字仮名交じり書」には「臨書」のできる古典はないので、文字数の多少にかかわらず、全て「創作」課題になります。「創作」ですから、どこにもない独自の字形を作り上げて、自由に表現することも可能です。しかし、本誌の段位認定試験では、奇を

てらったものは「良し」とはしていません。なぜなら、この試験は、「実力」を評価するものだからです。

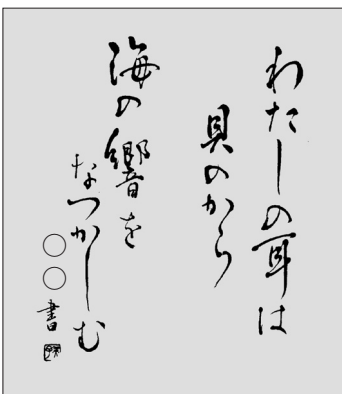
上図に示した通り、書写学習をベースにしても、漢字学習の「做書」とそれに調和する仮名で書くとしても、仮名古筆の臨書で培った力を発揮するとしても、個々の文字の「字形・線質」を考えるだけでなく、語句や文全体の統一感が必要であり、さらに「紙面構成」を考える等、様々な力が求められるのです。

ここで、次の二作品を見ていきましょう。

HⅡ五段・漢字仮名交じり・創作



IⅡ六段・漢字仮名交じり・創作



外(単体部分)の字間が不揃いになっているのが気になります。特に、本来横広に書く「ぬ」が、他に比べて小さく字間も詰めて書かれているので、せっかく生み出されているリズムが不自然に感じられます。おさめ方に留意されると、さらに充実するでしょう。

Iの作品(大色紙)は、余白を生かして紙面におさめているので、全体としてはまとまっていますが、ここでは、さらなる実力向上を目指していただきたいと、辛口で申し上げます。

例えば「文字の大きさ」に注目しましょう。書写にも通ずる一般的な字形として書かれているが、「わ」と「ら」は大きく、「な」は極端に小さいので、そこに必然性が見当たりません。また、墨だまりが散在しているため、動きが停滞して見えるのも惜しいところです。どう書くのかを定めてからまとめられるとよいでしょう。

連綿を入れるのであれば、なおさら、仮名古筆を意識した流麗で澄んだ線が似合うでしょう。

加藤東陽先生が、以前の審査で、次のような講評を述べられています。

「…漢字仮名交じりの課題では、漢字と仮名の調和(字間や行間などのバランス)が取れずに苦慮している作品が多く見られた。…」

